

Transformation 越境から生まれるアート

アーティゾン美術館（京橋） 2022.04.29～07.10



19世紀後半の「マネ」や「印象派」をはじめ、前衛的な動向の相次ぐ出現に彩られる「モダン・アート」の背景には、美術に関わるヒトやモノ、情報の移動や流通が、国家や大陸を超えて活発になされる。いわば美術をめぐる国際化の進展

をうかがうことができるものである。

本展は、「越境」と「変化」を着眼点に、19世紀半ばから第二次大戦後までのヨーロッパ、日本、アメリカの美術を展望するという内容である。

異質な存在との接触や対話を契機にみずからの芸術を刷新していった4人の画家、「ピエール＝オーギュスト・ルノアール」「藤島武二」「パウル・クレー」「ザオ・ウーキー」を取り上げ、新収蔵作品2点を含む、「約80点」の作品と資料により、その創作の態度に光を当てるという企画である。



P. O. ルノアール 《浴後の女》1896年 油彩/カンヴァス

画伯が晩年に取り組んだ裸婦像を描いた作品は、彫刻作品を思わせるほどで、ふくよかな量魂の把握が見事で、色彩は健康的な肌色が輝いている。白い布や黄色、オレンジ色、緑、茶色といったルノワール絵画の属性となっている親密な色彩群、つまり黒色を排除し、最高の純度を持った純色のみ配色は「虹色のパレット」と呼ばれている。



藤田嗣治 《猫のいる静物》1939～40年頃
油彩/カンヴァス

南米滞在中に習得した豊かな色彩使いと輪郭線は見事な調和を果たしている作品。

テーブル上に無造作に広げられているのは、カニやロブスター、卵、ネギ、ブドウなどで、西洋画では伝統的ないわゆる「静物画」のスタイルである。その周囲に静物を覗きこむ「猫」そして飛び立つ「シジュウカラ」が配置され、静と動、生と死の鮮やかな対比がなされている。